



梁間三間の重層門建築に関する研究

—飯能市長光寺三門の事例分析—

k 97066 佐藤 美樹

1 章 はじめに

1. 1 研究背景及び目的

埼玉県飯能市指定文化財である長光寺の三門は全国でも珍しい梁間（または梁行、奥行のこと）が三間（実長二間半）の平面構成を持つ。門はその性質からしても、必ずしも奥行を深くする必要はなく、一般的に梁間は一間ないし二間までである。そこで長光寺の三門が何故、特異な平面構成を成しているのかを研究により明らかにする。

1. 2 研究方法

長光寺三門を実測調査及び痕跡調査した結果により、この三門を復原する。そして他の楼門と比較研究することによって、その建立背景を探る。

2 章 飯能市指定文化財長光寺三門の調査

2. 1 調査内容

調査及び見学を下記の日程で行った。

表1.調査建築一覧表

日程	寺社名	所在地	建築形式	見学・調査
6/29 12/17	長光寺三門	埼玉県飯能市	三間一戸	実測調査 痕跡調査
8/21	小室山妙法寺 楼門	山梨県南巨摩郡増穂町	五間三戸	見学
8/22	甲斐善光寺 楼門	山梨県甲府市善光寺町	五間三戸	報告書確認見学
8/23	大善寺楼門	山梨県東山梨郡勝沼町	三間一戸	報告書確認見学
8/23	清白寺	山梨県山梨市	仏殿	報告書確認見学
11/5	岩木山神社 楼門	青森県中津軽郡岩木町	五間三戸	聞取調査
11/7	増上寺三門	東京都港区	五間三戸	聞取調査
11/10	天寧寺山門	東京都青梅市	三間一戸	聞取調査

2. 2 長光寺三門の実測調査

実測調査を行った長光寺三門の調査図面を図1から図6に、三門の写真写真1から3に、そして構造・意匠形式を表1に示す。

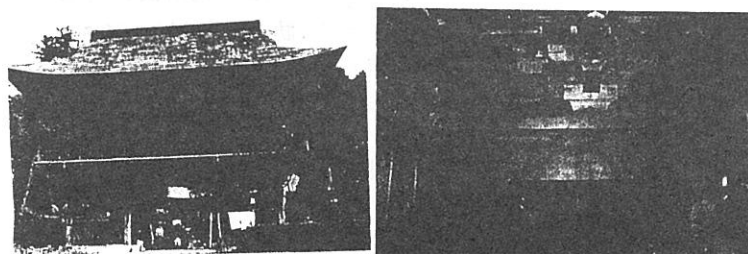


写真1. 長光寺三門

写真2. 長光寺三門上層内部

2. 3 長光寺三門建築の概要及び特徴

三間一戸の楼門で桁行三間、梁行三間（実長二間半）の平面構成である。上下二層より成り、下層では内側の円柱四本の周囲を角柱十二本が取り囲む。円柱四本のうち奥の二本が通し柱となって上層に立ち上がり、頭貫、台輪により禅宗様詰組の斗組を支える。上層内部は参拝空間となる。特徴としては、梁間が三間（実長二間半）であることが一般的な門と異なる。また12本ある角柱のうち、6本の角柱の下部には材を継ぎ足した痕跡が残っている。そして上層の内部にある詰が楼門の一般的な形式なものとは異なる。

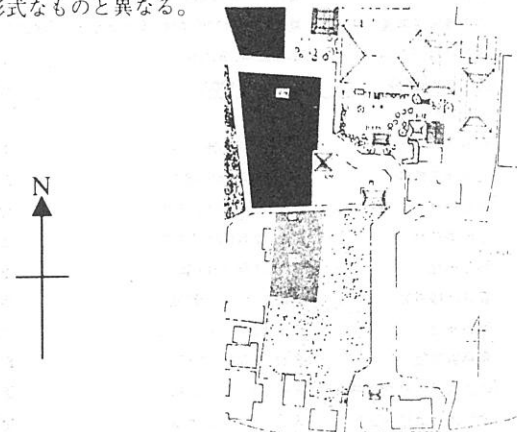


図1. 長光寺配置図 1:2400

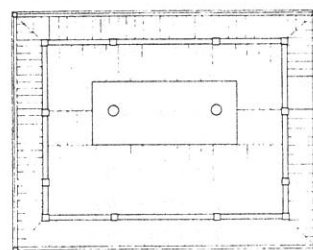


図2. 長光寺三門上層平面図

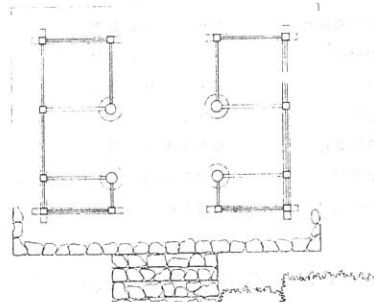


図3. 長光寺三門下層平面図

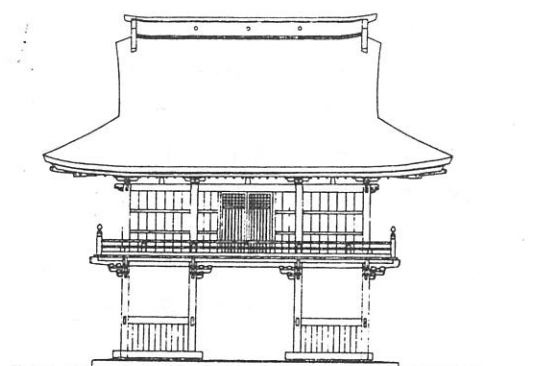


図4. 長光寺三門正面立面図

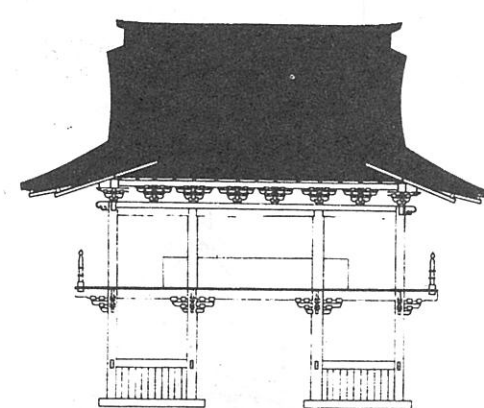


図5. 長光寺三門桁行断面図

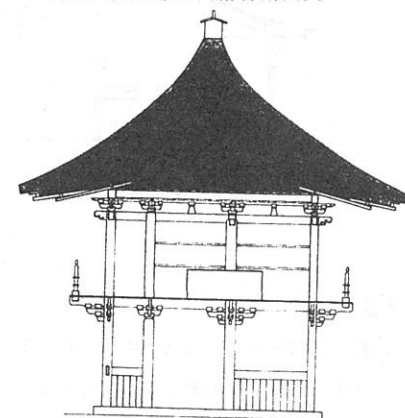


図6. 長光寺三門梁行断面図

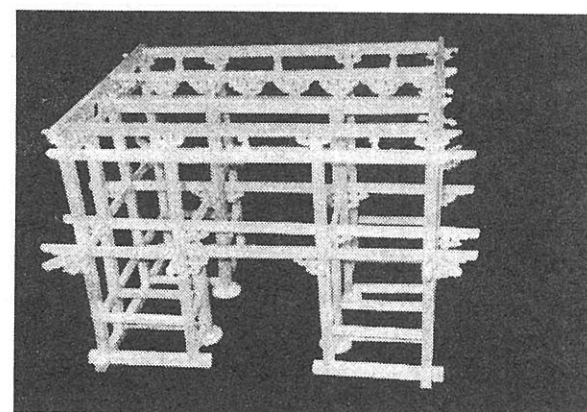


写真3.長光寺三門軸組模型

表2. 構造・意匠形式

1 建築名	長光寺 三解脱門（楼門）
2 所在地	埼玉県飯能市大字下直竹1056番地
3 宗派	曹洞宗
4 創立・沿革	江戸時代初期に建立、江戸時代末期に再建したと思われる
5 付属建物	惣門、地藏堂、中雀門、本堂、鐘楼、旧庫裏、新庫裏、大師堂、開山堂、土蔵、墓地、玄関
6 建立・修理	1366年創建 1964年本堂修理
7 棟札等資料	無
8 大工	不明
9 基本構造 桁行×梁間 屋根形式・材料 向拝 破風	3間×2間半 入母屋造・赤色鉄板葺。 無 品軒、破風、無懸魚（六葉と樽ノ口）、木連格子
10 基壇・基礎 礎石 礎石 向拝礎石 亀腹	基壇：自然石積 無 自然石積 無 無
11 軸部 柱形状 長押 蟻 内法 腰 切目 地 貫 頭 飛 内法 腰 地 木鼻	中央4本総付円柱、周囲12本方柱面落 無 無 無 無 無 無 有 無 無 有 無 有 無 地覆は有 初層：無 上層：禅宗様木鼻（外と内は同じ「蟬影」）
12 組物 種類 尾垂木 通肘木 木鼻 実肘木 支輪	初層 上層 二手先、変形肘木を受け その肘木が縁葛を受ける。 平三斗、実肘木斗（通肘木の上 に丸桁を直受：長方形断面） 有：禅宗様木鼻 有：禅宗様縁形 無
13 中備 外廻り 内廻り	無 無 有：間斗束 有：間斗束
14 軒	無
15 妻飾	無
16 縁・高欄 縁 高欄	切目縁 擬宝珠高欄
17 向拝 柱 組物 中備 垂木（軒） 繫虹梁 手扶	無 無 無 無 無 無
18 床 内障 外障	初層：タタキ敷 上層：板床 無
19 天井	初層：上層の床板（鏡天井） 上層：中央円柱より前面が格天井、後面が竿縁天井
20 他	中央円柱より前面：円柱の上に頭貫・台輪有 詰組は禅宗様出組（拳鼻） 中央円柱より後面：肘木が切れ、木鼻が本来出るところも切れている 上層正面中央と背面中央に板障子引戸有 上層東側面第1中間板障有

3 章 三門（山門）、楼門、二重門について

3. 1 三門と山門

三門（山門）は伽藍配置上の位置とその宗教上の意味から決まる呼称であり、楼門及び二重門は構造上の形態から決まる呼称である。三門とは仏教でいう迷いから解放されたいと願う者が、必ず通らねばならない三つの門（空門、無相門、無作門）、つまり三解脱門からきている。また本堂は法空、涅槃になぞらえている。なお山門と書くことが多いが、これは平安時代以降、寺院が山地に建てられることが多く

その寺域を限るものとして、また寺院が山号を冠することから呼ばれるようになったものである。特定の形式があるわけではない。

三門は禅宗寺院では仏殿の正面に当たり、奈良朝時代の中門に相当する。もちろん後には他宗の寺院にもみられる。なお三門には仁王を置かず、階上に宝冠釈迦三尊（脇士は月蓋長者と善財童子）に十六羅漢像を安置するのが通例であり、長光寺三門も同様である。

3. 2 楼門と二重門

門を外観から見て分類すると、単層（一重または一階）と重層（二重または二階）となる。重層門のうち一階に屋根がなくその部分に高欄つきの回縁をめぐらしているものを楼門と呼び、二重屋根のものを二重門と呼んで区別している。長光寺三門は楼門である。

4 章 長光寺三門建築の復元

4. 1 痕跡調査より

12本ある角柱のうち6本の角柱に後から部材を継ぎ足した痕跡があった。また上層の内部に見られる詰組は、一般的な楼門建造物にはないものである。そこでこの三門の前身として他の建造物があったのではないかと考えられる。ある建造物を楼門として再建する際、何らかの理由や考えに基づき梁間を三間としたのではないかと考える。

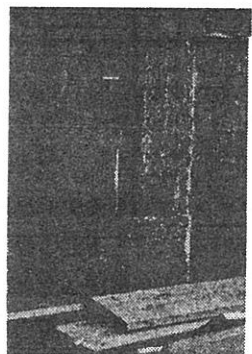


写真5. 三門の柱脚部

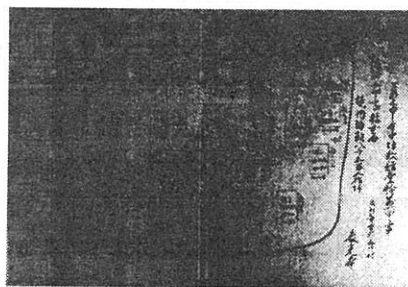


写真6. 長光寺古図

4. 2 考察

長光寺三門の前身建造物は何であったのか。長光寺所蔵文書中に寛政8年（1797年）の古図がある。それによると当時の長光寺に四間四方の仏殿があったことがわかる。しかし現在の長光寺の伽藍に仏殿は存在していない。古図に記されている記述に「大破・付取壊」とあり、更に「佛殿大破跡」とも記されている。このことから仏殿は壊れてから再建されなかったことがわかる。

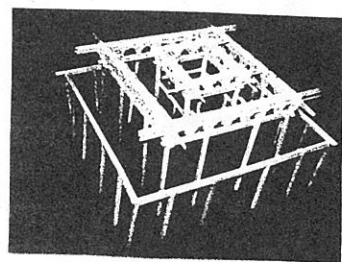


写真4. 長光寺仏殿軸組模型

そして現三門の上層の参拝空間内部に見られる禅宗様の詰組が仏殿の内部に見られる詰組と類似している点、角柱に部材を後から継ぎ足した痕跡がある点より前身建造物は古図に記されている仏殿ではないかと考える。仏殿が壊れた際、仏殿を再建するのではなく、その部材で三門を造ったのではないだろうか。そこで、まず古図に記されている仏殿を復元する。その復元結果と現在の三門とを比較検証する。復元した仏殿の姿を図面と模型により以下に示す。

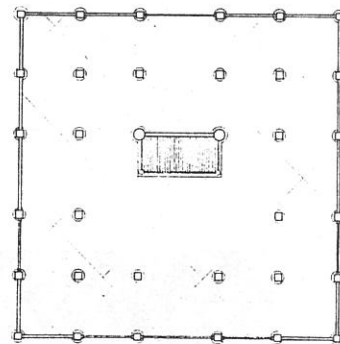


図7. 長光寺仏殿平面図

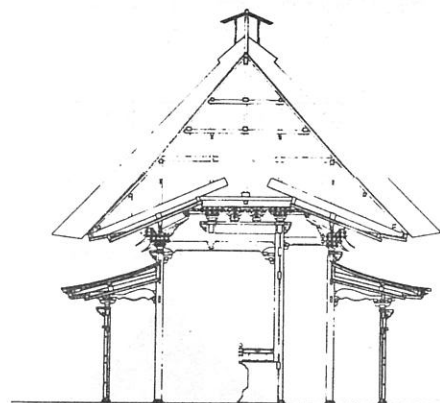
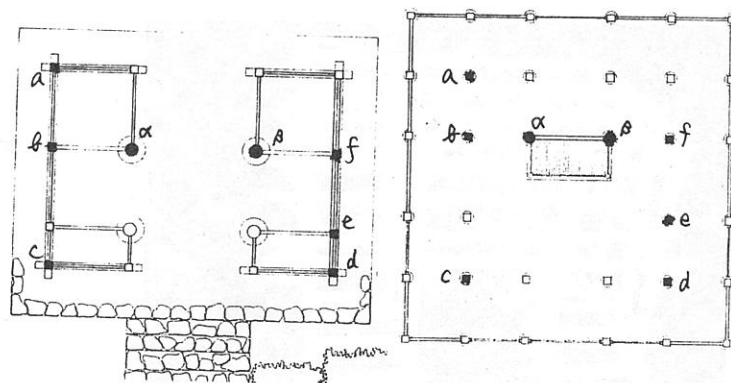


図8. 長光寺仏殿断面図

4. 3 検証

復元した仏殿と三門を比較すると、共通していると考えられる主要柱材が円柱で2本、角柱で6本あることがわかる。また斗組も禅宗様斗組（二手先）6組が転用されたのではないかと考えられることができる。



a~f:角柱転用材 a, β:円柱転用材

5 章 結論

5. 1 検証結果

以上に示したように継ぎ足した痕跡のある6本の角柱と、通し柱となっている円柱が壊れた仏殿で利用可能な部材であったのだろう。他の角柱や円柱など、三門を建立するに当って足りない部材は新たに追加されたと思われる。そして、壊れず残った詰組は三門の上層内部の参拝空間に納めたため、楼門建築に殆ど見られない詰組がこの三門には存在するのだと考える。これらの復元結果より仏殿を構成する部材を可能な限り、余すことなく三門として利用しようとする意図が窺える。以上のことから長光寺三門は寺の創建時に存在していた仏殿が大破した後、三門の一部として転用されたと考えられることができる。

5. 2 梁間三間の門建築について

以上により仏殿の材を利用して三門を造り出したといえるが、何故、梁間が三間となったのだろうか。ここで参考とするために長光寺三門以外の門で梁間が三間ある門を調査した。

梁間が三間ある楼門ないし重層門が全国に4棟あることが現時点では確認されている。何故、これらの門が三間の梁間を持つに至ったのかを表3に、これら4棟の写真は写真7~10に示す。

表3. 梁間三間の門 一覧表

門/種別	所在地/建立年代	梁間が三間である理由
法隆寺中門 二重門・四間二戸 (国宝)	奈良県斑鳩町 法隆寺山内1-1 飛鳥時代 持統9年頃 (695年頃)	飛鳥寺・大官大寺・山田寺・隈檜寺の中門も梁間を三間としていたため、飛鳥時代の共通した形式であったとされる。また、正面の桁行が四間であり、軒の出が深い重層門であることを配慮し、上層荷重の印象や平板な印象に陥ることを避けた。さらに、廻廊の構成との均衡も考えて三間となった。
増上寺三解脱門 二重門・五間三戸 (重要文化財)	東京都港区 芝公園4-7-35 江戸時代 元和8年 (1622年)	伽藍の規模が大きかったため伽藍とのバランスと、山廊とのバランスを考慮した。また門の規模も大きいので、宮大工に受け継がれた知恵と経験から梁間が三間となった。
岩木山神社楼門 楼門・五間三戸 (重要文化財)	青森県中津軽郡 岩木町百沢27 江戸時代 寛永5年 (1628年)	五間三戸と規模が大きいため、梁間を深くしないと上層の荷重に耐えられない。また、二階に仏像を安置し、その参拝空間として、梁間が三間必要であった。
天寧寺山門 楼門・三間一戸 (東京都指定史跡)	東京都青梅市 根ヶ布1-454 江戸時代 宝暦9年 (1759年)	側面中央間に曹洞宗伽藍特有の廻廊を取り付けようとしたためか、山門四脇間に四天王を配置しようとしたためか、あるいはその両方の理由からであったと考えられる。しかし実際には廻廊ではなく袖壁が正面側柱筋に取り付き、背面両脇間には何も置かれず、正面両脇間に二天像が安置されている。それでも本堂上梁牌、山門棟札に四天王の名前が書かれていることを考慮すれば、山門四方に四天王を配置しようとした意図は十分窺われる。

5. 3 梁間が三間である理由

正面桁行が大きく、門の規模が大きいため梁間を深くした、というこの理由は法隆寺中門、増上寺三解脱門、岩木山神社楼門に共通しているが、三間一戸の長光寺三門においては当てはまらない。また天寧寺山門もこの理由には当てはまらない三間一戸の門である。

この天寧寺山門は長光寺と地理的に非常に近い位置にあり、山門の建立年代が江戸時代で長光寺の建立時と近い年代である。加えて同じ曹洞宗である。楼門の形も長光寺三門の梁間が実長二間半であることの相違程度しかない。したがって、この年代にこの地域で流行った楼門の一形式と考えられる。そして仏殿という尊い建造物の部材を余すことなく使用したいがために、長光寺の三門は特異な平面構成になったと推察される。

参考文献

- 「東京都史跡天寧寺山門・鐘楼
通用門・外堀・二天像修理工事報告書」
1983年 東京都史跡天寧寺山門等修理委員会
- 「東京都の近世社寺建築
—近世社寺建築緊急調査報告書—」
1989年 東京都
- 近藤 豊 著 「古建築の細部意匠」
1972年 大河出版
- 町田 甲一 著 増訂新版「法隆寺」
1987年 時事通信社

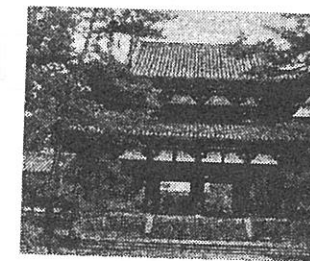


写真7. 法隆寺中門



写真8. 増上寺三解脱門

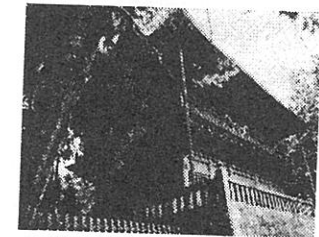


写真9. 岩木山神社楼門

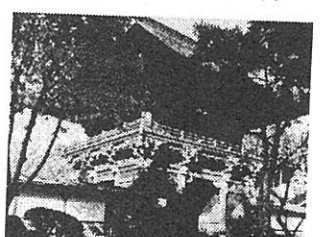


写真10. 天寧寺山門